

---

# 高校生の時間外廊道（じかんがいろうどう）

よみよみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

高校生の時間外廊道じかんがいじゅうどう

### 【Zコード】

Z4985Z

### 【作者名】

よみよみ

### 【あらすじ】

普通の高校生、愛田千秋に届いた一通のメール。それが全ての始まりだった。メールは、名無しで内容は、『踏ませるな、助ける』全く訳が分からぬ、メールだったが。千秋は、そのメールの重要度を次の日? になつてから気づくのであった。ループ!? タイムトラベル!? 超能力!? とにかく常識は、4月6日に覆された!!

## 第1話 一通のメール（前書き）

この作品はフィクションです。実際の人物・団体・事件などには一切関係ありません。

## 第1話 一通のメール

4月6日のこと……

俺の睡眠を邪魔したのは、いつもの目覚まし時計のうるさいアラームでは無く、一つメールの着信だった。

ブーン、ブーン、ブーンブーン！

俺の枕元で、これでもかと自己主張をする、人類の英知の結晶。「あーうるさいな～誰だよ～こんな朝っぱらから、メールなどしてくる奴は」

そのバイブ音によつて半覚醒状態の俺は、重い瞼を少し開ける。部屋のカーテンの隙間からは、暖かそうな日の光が指しこんでいる。残念ながら、もう朝みたいだ。

携帯を開けて液晶画面に目をやると、6時58分をデジタルがとても分かりやすく教えてくれた。いつも起きるのは7時ジャスト。どうやら、もう2度寝をしている暇は、無いみたいだ。俺は一つのため息を漏らす。

携帯の画面には、新着メール1件。

From 不明

Sud がんばれよ。

『1日四ミッション。『踏ませるな、助けろ』

はつきり言おう。訳が分からぬ。俺の睡眠時間2分を返せ  
ジリジリジリジリ！

「うるせー！」

「バン！」

「あー今日は、ついて無い1日になりそうだ」

眠たい眼を右手の指で擦りながら、ため息混じりに呟いた。

朝の登校。俺は、通い慣れない道を自転車で走っている。確かにまだ新鮮さがある道だ。昨日が入学式だったのだから、当然の事だろう。中学の時の通学に比べて、風を切る感覚が気持ちが良いと思つるのは、新生活のスタートと言つ出来事が加担しているのかもしない。

だが、俺は余り新生活に期待はしないように心がけている。本来なら、もっと新生活らしく、ウキウキとしていたほうが良いのかかもしれないが、変に期待すると、あとでの理想のギャップに耐えられない可能性もある。実際、中学の時もそんな事があつたし、妙な期待は、しない方がいいだろう。俺は、同じ轍を一度も踏みたくはない。とはいえる、俺だって、全く期待していなければ、嘘になる。そりや高校生だし、彼女の一人でも作りたいなんて思つてるのは此処だけ話だ。つまり俺は、何処にでもいる普通の高校生で在り、高校生らしい普通の日常をエンジョイする、そんなつもりだが、少し気になるのが朝のメールだ。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日目ミッション。『踏ませるな、助ける』

何だ、この訳のわからない、文章は？ 新手のローンメールだろうか？ それとも俺の悪友か誰かの悪戯だろうか？ 俺は頭の中で自分の身の回りに居る容疑者の顔を思い浮かべた。だとすると、一番怪しいのは

俺がこれから順調に行けば3年間はお世話になるであるだう学び舎に着き、自転車小屋へ我が愛車、まだ新車の19800円。命名『壹キユツパ』を駐車していると、校門の方から馬鹿のように、いや間違つた、馬鹿な容疑者第1号が大手を振つてこちらへ向かって自転車を漕いで来る。

「よつおおー！ 愛ちゃん

殴りたくなる笑顔で自転車を漕いでこちらへ向かって来る悪友に、どうやら俺もそれなりの誠意を見せなきゃいけないか。

タタタツタ！ タタタツタ！

俺は、馬鹿に向かつて、走つて行き、右腕で朝の挨拶のラリアツトを食らわしてやつた。

「グツトモーニング！」

「ごふ！」

自転車から倒れ込み、その場に転倒する馬鹿。

「痛ててて」

俺は、ソイツを見降ろしながら、

「おい、そのあだ名で呼ぶなど、何度言つたら分かる？」 佐伯 利一  
「俺の名前は、愛田 千秋あいだ ちあきだと、あと何回言えば、その頭で理解出来る？ 中学三年間でお前は、何を学んできた？」

親指を立て利一は、

「お前の好きなのもからスリーサイズまで覚えて來たぜ」

「……樂に逝けると思うなよ」

俺がコイツにいつものノリで殴りうとした時、俺達の目の前に、制服を着て分厚い黒い本を持っていて、微笑んでいる、長髪の女子生徒が

かつ、かわい

「通行の邪魔よ、消え失せなさい、ゴミクズ共」

「…………」

時が止まつた気がした。

俺達に女子とは思えない言葉を吐き捨てるに昇降口へと消えて行つた。

「通行の邪魔よ、消え失せなさい、『ミクズ共

「…………」

時が止まつたきがした。あんな言葉を女子に吐かれたのは、生まれて初めての体験だつたと思う。

そう俺達に言い放つと、その女子は、昇降口へと消えて行つた。

「…………おい、千秋」

その女子が立ち去つた後、利一は俺に驚いた顔をして俺に言つた。

「何だ、馬鹿」

「高校つて怖いな」

確かに、怖かつたが、そんな事よりも、俺は、

「そうだな、だか俺は、お前のほうが、ある意味怖いよ」

「それって、どう意味だ？」

「コイツと話しているのは、疲れるから、俺は利一を置いて、早足で昇降口へと向かう。

「おい、待つてよ」

急いで、自転車を置いて、俺の後を付けて来る、利一。

「それにしても、奇跡だな、また千秋と、一緒に学校になれるなんて、やっぱ、神様は、居るな」

何をしらじらしい。お前が俺の受けた高校を調べて、同じどこを受けたんだろうが！ 滑り止めまで、同じどこ受けやがつて。こんな奴が、俺よりも、数倍頭が良いと思うと、人間は、つぐづぐ平等でないと感じてしまう。

「おい、利一」

「ん？」

「明日、学校来ても、お前の上履き無いからな」

俺は、コイツは、虚め宣言をした筈だが、

「何だよ、俺の上履きが欲しいなら、今やるよ」

下駄箱から、上履きを取り、俺に渡す、利一。コイツは、どんだけポジティブなんだ？ このポジティブを日本全国民が持つていれば、自殺なんてモノは、この国に無くなるかもしれないな。

「おお、そうか」

俺は、まだ白く汚れのない、上履きを受け取り、

「利一、今何時だ？」

利一は、何も見ず、素早く、

「今、8時26分36秒を回ったところだけど」

時刻を答える。何も見ずに。

「あと、3分弱かホールームが始まるのは

「おらああ！」

ブン！

昇降口の外へと、上履きを投げ捨てた。上履きは、華麗な弧を描き、学校の柵を越えて行った。

そのあと俺は、自分の教室を田指し、前を向き歩きながら、我が悪友に背中を見せ右手を頭上へと持つて行き。手を振る。

「じゃあな、高校始まって、そつそう、遅刻するなよ親友」

何か後ろで、ぎゃーぎゃー言つていたが、俺はそれをスルーし。何事もなかつたように、スタスターと歩く。背後から駆けだす、足音が聞こえて、小さくなつていったのは、利一のものだろう。

そして、俺が自分の教室。1・3に入ると、いかにも、始まつた感じのういういしさ溢れる光景が広がっている。話している者、席に座つて静かにしている者、音楽を聞いている者、本を読んでい

る者、様々だ。まだ、慣れていと/or/うか、居心地の変な空間。中1の時や、クラス別けをした時を思い出すな。

げつ！

俺が、なんとなく、クラスを見渡していると、さつき、俺と利一に毒舌を吐いた、女子生徒が、静かに、本を読んでいる。  
普通にしていれば、可愛いんだがな……アイツには、関わらないよつにしどこう。

それから、1分程経つと、教室に担任の男生教諭が入つて来て、軽く挨拶をし、

「それじゃあ、まず、出席を取ります、まず、安久津」

その時、点呼の声をかき消すかのように、教室の前のドアが開いた。

ガラー！

「はあ、はあ、はあ、はあッ、いきなり、遅刻してスイマセン！！」  
ドアを開けるな、いなや、大きくお辞儀をする息を切らした男子生徒が。見覚えのある頭、聞き覚えのある声。

何故お前がここに来る利一？　お前の教室は、隣の4組だろうが！  
頭を上げた、馬鹿と、俺は目が在つてしまつた。

「アリヤ？　なんで、千秋が此処に？」

他人のフリ、他人のフリ、他人のフリ。

「君、何処のクラスだい？　このクラスは、全員そろつているんだが？」

担任が、馬鹿に問う。確かに、座席には、もう空席は無い。つまりこの空間にお前の居場所は無い。速やかに在るべきところへ帰れ。

「え？　此処は、4組じゃ……」

一步さがり、ドアの上にあるクラスプレートを見る利一。

「あつ、失礼しました——！」

そう言って、ドアを閉めて、左の4組の方向へ消えていく利一のシルエットが、教室のドアの上にある長方形の曇りガラスに写った。

そして1 3我がクラス内は、笑いに包まれた。  
はあ～アイツと、友達だと、知られたくない。無理だと思うが。

### 第3話 絶滅危惧種

そして、学校が普通に始まって一日田といつ事もあり、これと書いて授業らしい授業もせず。あつといつ間に、4時間が過ぎて、昼食の時間がやつて來た。

今日は、母親に作つて貰つた弁当だ、学校の売店といつのを使ってみたかったが、どういうモノか分からぬので、今日のところは無難に弁当を持つてきた。

教室を見渡すと、早くも数人のグループを作つて、机をくつ付け、食べようとしている者達も居るが、大多数の人は、自分の座席で、一人飯。1日田じゃあ、まあ、こんなものだろ。

俺が弁当を鞄から取り出した時、教室のドアが開らき、朝のリプレイのように、また、利一がやつて來た。

「ちあきーー！一緒に弁当食おうぜーーー！」

少しざわついていた、教室が一瞬で静まりかえった。まだまだ他人行儀が横行している教室でコイツの行動、言動は場違いだからだ。

嫌な間だ、仕方ない。俺は右の手のひらを額にやり、はあーと大きなため息をつくと弁当を持って席を立ち、利一の居るドアへ歩いて行き、静かにドアを閉め廊下に出た。

「千秋、一緒に飯食おー」

俺は、笑顔の利一の頭を掴んで、教室の壁へと、側頭部を叩きつけた。

ドガ！

「あああ、脳細胞が死んだあーーー」

あすかわらずリアクションの大きい奴だ。

「良かつたじやないか、俺は、お前を殺すつもりだったのに、脳細胞だけで済んで、一生分の奇跡を使い果たしたな、利一」

「仏壇には、千秋と、ツーショットの遺影を」「

ドガ！！

「何か言つたか？」

利一は、流石に2発目のウォールアタックが堪えたのか、かすれるような声で、

「いいえ、すいません」

「で、飯は、何処で食うんだ？」

「千秋、俺と一緒に飯を食つてくれるのか？」

「勘違い、するなよ、この状況で、教室に戻りたくないだけだ」  
変な空気になってしまった、教室にわざわざ戻りたくは無い。もう「コイツ」と俺の交友関係はきっとクラスの連中に残念ながら知られてしまっている事だろう。

俺がそんな事を嘆いていると、

「この、シンデレメー」

と、言いながら、俺の頬に人差し指を当てやがった。

怒。怒。怒。負の感情がヒートアップ。

ドガ！ バキ！ ドン！ バシ！ グギ！

「ぐぎやああああ」

残酷過ぎて、描写出来ません。擬音語と、利一の悲鳴だけで、イメージして下さい。

「行くぞ」

鼻から、赤い体液を流しながら、利一は、

「はい！」

と、弱々しい声を出した。まあ、問題無い。そして俺と利一は、取りあえず廊下を歩く。

「ち、ちいあき」

わざとだらうが、女々しい声で俺の名を呼び、

「最近俺に対するツツ ノミが激しすぎやないか？」

「何言つているんだ、利一はドMだから喜んでいるんだろ？」

俺は、邪氣の無い口調で利一に言つた。

「いや、俺はドMじゃないからな、それとも少しお柔らかく、ツツ ノミでもいいだらう？」

「そんな風になつたら、俺のお前の関係は、崩壊するがそれで良いなら良いけど。大体お前は、どうしてそんなに俺に構つんだ？ 構うにしても他の構い方が在るだらう？」

コイツの俺に対する言動はとにかく気持ち悪い。

「だつてさ 千秋優しいじやん」

「はあ！？」

不意な言葉に少し動搖しまつた。

「俺のどつ、何処か優しいだよ

「俺なんかに構つてくれるしさ 不意な言葉にそんな驚くし。素直じやん」

コイツは頭が良いんだか、悪いんだかたまに分からなくなる。頭脳は良いんだが。

「もしかして、照れた？」

「照れて無い」

ちょっとと声に感情をこめて言つたが、  
「顔が赤くなつてるぞ～」

「照れて無い、言つてるだろ！」

そんな事を言つているが、若干頬が熱い氣もある。もしかしたら

顔が赤くなつてゐるかもしけない。こんな事を面と向かつて言われるのは苦手だ。

「やにやしながら俺の顔を見る利一。

「改めて聞くが、何処で食うんだ？」

俺は、このまま行くと、話しの主導権を利一に取られると思い。  
無理に話しの流れを変えた。

「せつかく高校生になつたんだから、決まつてるじゃんか。天氣も  
良いし、屋上で昼飯つて、俺、やつてみたかったんだよなー」

目を輝かせて、言つ利一。

「おいおい、屋上つていつたら、不良のたまり場つてイメージしか  
無いんだが」

なんかんだ言いながらも、階段を上る。

「大丈夫だつて、今、平成何年だと思つてゐるんだよ、そんな絶滅  
危惧種居る訳が」

そして、屋上の鉄の扉を開けると、気持の良い風が、髪をなびか  
せたと思つたら、目の前に在つた光景は、煙草を咥えた、不良4人  
が立つていた。

絶滅危惧種居た――!!

## 第4話 屋上

そして、屋上のドアを開けると、氣持の良い風が、髪をなびかせた  
と思ったら、目の前に在った光景は、煙草を咥えた、不良4人。  
絶滅危惧種居た――――！

「あん！」

俺、一般高校生と、一般変態性を睨む、不良。

俺達は、不良達に聞こえ無いよう、囁くように口にして、

「おい、利一、あんだって、『あん』」

「『あん』って何だよ、俺の知っている『あん』って、あんこの『餡』と、こないだ見た、保健のDVDで観た、女の人の喘ぎ声の『あん』しか、知らねえよ」

「アレじゃねえか、外国語じゃね？ どつかの国の挨拶的な」

「あんな、怖い顔で睨む挨拶する、国が在ったら、もうその国終わ  
つてるよ、北〇鮮も真っ青だよ」

そんな、話を男達に聞き取れないくらいの声で話ををしている  
時、俺は、二つ間違つている事に気付いた。そこに居るのは6人だ  
と。不良らしき一人が、何故か分からぬが、うつ伏せに倒れてい  
て動かない。もう一人は、不良4人に囲まれている、女子生徒がい  
ることにだ。

男4人が黒く分厚い本持つた、女子生徒を囲んでいた、そして、  
ソイツは、朝、俺達に毒舌を吐いた女子であり、俺のクラスメイト  
だ。一時間目のホームルームでの自己紹介をした時にアイツだけは、  
覚えた。記憶力は、悪いほうだが、迫力のある苗字と、自分の名前  
と一文字被つっていて何より、初対面で毒舌を吐かれたのだから、意  
識をしなくても、頭に残つてしまっていた。

「鬼塚 千尋……」

「あにづか ちひる

そう俺の口から、自然にこぼれた。

「ちょっと、貴方達、臭いから、消えてくれないかしら」

男4人に囲まれた状況で鬼塚は、全く怯むことなく。男達に言葉を浴びせる

「あん、何だ、このアマ！」

また『あん』だ。

「ああ、そう、貴方達の、そのちつぽけな脳じや、今の言葉を理解出来なかつたのね。御免なさい、じゃあ、訂正するわ、そこのフエンスから、飛んでくれないかしら？」

『おい！ 煽つてどうするつもりだ？』『勝ち田何かないだろう』普通なら、そう思つところだろうが、俺は、男達よりも、鬼塚の方が、怖く感じた。

「おい、どうする？」

利一が俺の耳元で囁く。

『どうするつて、どうにかして助けるに』

ドガ！

一瞬、鬼塚から目を離した時、何か、鈍い音がしたと思つて、鬼塚のを含めた男達の方を見ると、鬼塚の前に居た男が、のけ反るような格好で空中に居た、足が屋上の床から離れている、いや、飛んでいる？ 鬼塚の右手は、縦方向に本を向けて、大きく上げていた。そこで、ようやく俺は理解した。鬼塚がこの分厚い本で男の顎を吹っ飛ばしたのだと。

「ガツ」

ドガ

そして、男は、その場に仰向け倒れ込んだ。動かない。痛いなどの声が出るのかと思いきや、ぴくりとも動かない、どうやら、気を失つたらしい。他の3人も倒れた男を見て動かない、動揺しているのが表情から読みとれる。俺と利一も動かない。そして、次に動いたのが、鬼塚だった。

女とは、思えない身のこなしで、男達の元へ飛び込んでいき、本で蹴散らして行く。

そして、1分後その場に立っていたのは、鬼塚一人だった。圧倒的。まるで、大人と子供の喧嘩のようだつた。

## 第5話 就寝

そして、男4人が倒れている場を悠々歩き、出入口つまり、俺達の方向へと歩いて来る。

「全く、人がせっかく、静かに昼食を取らうとしてたのに、飛んだ

邪魔が入ったわ」

俺と、利一の間を通り、鬼塚に俺は、

「おい、コレどうするんだよ、ちよつとやり過ぎなんじゃないのか

？」

その言葉を聞き、足を止める。

「これから、教員に言つて、来るわ。まあ、最低でも、停学、悪ければ退学かもしれないわね」

自分を自嘲するかのように、少し笑う鬼塚。

「別に後悔は、しないわ。あと、やり過ぎ？ 知つた風な口を聞かないでくれないしら、そいつらは、私の夢を汚したのよ」

そう言つて、鬼塚は、階段を降りて行つた。

「ふう～おかねえ～」

緊張の糸がれたらしく、利一が言葉を漏らす。

「それより、飯は、どうすんだよ。こんな惨劇の現場で俺は食いたくなーぞ」

利一は、何も見ずに。

「昼休みは、あと、22分37秒あるけど」

「仕方ねえな、教室に戻つて食つか

「えーーー」

遠足が中止になつた、小学生みたいな顔をする利一。

「やめろ、気色悪い。だまつて、教室で食つてる」

そう言って、俺達も階段を降り始める。その時、俺は、朝のメールの事を思い出した。

「そうだ、利一、このメールを送ったの、お前じゃないよな？」

俺は、携帯を取り出し、画面を開き、利一に見せた。

From 不明

Sud がんばれよ。

「日田リッシュン。『踏ませるな、助けろ』

「ん、何だコレ？ 訳分かんないな

「宛先不明なんだよ、俺はお前の悪戯じゃないかと思つていいんだ  
か」

「俺じや無いよ、俺だつたら、千秋に送るんない、もつと可愛く『  
コレーションしてやるぜ』

親指を立て、自信ありげに言つ利一。マジ氣持ち悪い。どうやら、  
「イツでは無いらしい。

「ああ、食欲無くなつて來た」

「えつ、何で？」

俺は、利一の胸ぐらを掴んで、  
「お前のせいだよ

ドガ！

利一の額に頭突きを食らわして、一足早く、階段を降りる。

「じゃあな、黙つて、一人で飯食つてうよ、お前は、喋んなきゃ普通  
通なんだからよ」

「痛てて、分かつて無いな千秋、俺が変なのは、お前の前だけだよ

「お前今日、家に帰つても、家があると思つなんよ」

「それどういう意味ー!?」

それから、何だかんだで、利一は、何故か俺の教室で飯を食つて、何も特に変わつた事も無く、学校も終わり家に帰つた。

時刻は、23時40分。あと20分足らずで、4月6日も終わる俺は、眠くなり、いつもよりも少し早いが就寝することにした。春休みボケがまだ抜けて無い事もあるし、馬鹿の相手をして疲れた事もある。高校が始まつて間もないと言ひのこ、色々な事があつたな。

俺は、ベッドの布団の中に潜り込むと、あつといつ間に、意識が無くなつた。

ブーン、ブーン、ブーンブーン！

俺の枕元で、これでもかと、自己主張をする。人類の英知の結晶。

「あーうるさいな～誰だ！　こんな朝っぱらから、メールなどしてくる奴は」

部屋のカーテンの隙間からは、暖かそうな日の光が指しこんでいる。残念ながら、もう朝のようだ。

俺が寝こんだまま、布団から手を伸ばし枕元にある携帯を開けてみると、6時58分をデジタル表示がとても分かりやすく教えてくれた。いつも起きるのは7時ジャスト。どうやら、もう一度寝を

している暇は、無いみたいだ。

携帯には、新着メール1件。宛先不明。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日11時11分。『踏ませるな、助ける』

「また？ 誰だよホントに」

ジリジリジリジリ！

「うるせー！」

バン！

俺は一つの違和感、異変を感じた。そして携帯の日付を見た時、それは確信に変わった。

4月6日？ おいおい、携帯がぶつ壊れたのか？ 今日は4月7の筈だろ……

## 第6話 4月6日

4月6日水曜日？　おいおい、携帯がぶつ壊れたのか？　今日は4月7日木曜日の筈だら……

俺は、2階の自分の部屋から、1階のリビングにかけ降り、テレビを見た。

「お兄ちゃん、どうしたの？」

妹が朝食を取っていたが、そんな事は、関係無い。俺はテレビのリモコンを回す。

ペ、ペ、ペ、ペ、ペ、ペ、

「ちょっと、お兄ちゃん、私がテレビを観てたのに～」

そんなことを妹が言っているが、今はお構いなしだ。そして、天気予報をやっている番組で俺の指は、止まる。

「今日、4月6日の予報は、関東地方を中心に快晴」

なっ！？　今日は4月6日！？　おいおい、アナウンサーの間違いか？　それともこれは、録画か何か！？

俺は、台所へ行き、朝食の支度をしている母さんに

「母さん！」

「どうしたの、そんなに慌てて？」

「まだ時間は、あるでしょ、まあ、昨日、入学したばかりで、落ち着かないのは分かるけど」

昨日？　一昨日の筈だろ　昨日はもつ普通に学校へ行って、利一を殴つたりして、鬼塚が、不良をやつけるといふを見たりした筈だ。

「昨日が、入学式！？　一昨日じゃ無くて！？」

「なに寝ぼけているの、昨日は、私と一緒に、入学式へ行つたじゃない」

アレが夢？ アレが夢ならハイビジョンブルーレイも真っ青な高画質だぞ。

それから、今日だされた朝食も昨日と全く同じモノだ、テレビでやつているニュースも昨日観たモノと一緒にだ。

その後俺は、まだ事態を把握していないが、親も居るし、家に居ても進展が無いと思い、学校へと向かつた。

自転車を漕ぎながら、情報を整理して、俺は、一つの結論を出した。

アレは、夢だったのか？ はは、そうだよな、夢だ夢。シークムント・フロイトさんも、確かにこんな語録を残していたし「夢は現実の投影であり、現実は夢の投影である。」で在るつて言つてたし、まあ意味分かんねえけど。頭ではこの異常事態を解つてゐるが、俺は現実逃避をして、自転車を漕ぐ。気分の問題なのか、体調が悪いのか分からないが、足は重く感じた。

## 第7話 人間時報

そして、学校へ着いた俺は、自転車小屋に自転車を置いている。確かに夢だと、ここで、校門の方から利一が馬鹿みたいに

「よつおおー・愛ちゃん」

そう言しながら、俺の方へ自転車を走らせる、利一。

んな、馬鹿な！ あれは、夢だつた筈だろう、なんでここまで一緒なんだ!? デジヤブとか既視感なんて、レベルじゃあねーぞ！ 今日とこいつ時間が経つたびに、夢のいう逃避を壊されていく気がした。

俺は自転車を漕いできた利一をスルーした、利一は、不思議そうな顔をしている。そりやそうだ、いつも俺なら何らかの、アクション起こしていった筈だ、現に、あの時は、ラリアットを食らわしてやつた。

自転車を置いた、利一が、俺の元へ歩いて来た。

「どうしたんだ千秋？ いつもと違うぞ、体調でも悪いのか？」

俺は、ふと思つた、「コイツなら

「利一、今は何時だ！」

利一は、何も見ずに、

「8時24分も26秒を回つただけだ」

「違つ、何年、何日、何時、何分、何秒で聞いてるんだ！」

「なんだよソレ、どうかしたのか？」

「いいから、答えてくれ

「ああ」

少し戸惑いながらも返事をする利一。

もし、世界中の時計が狂つたとしても、コイツだけは狂わない筈だ。  
それくらいに、俺は時間に対して、利一に信頼している。

俺は、携帯の電波時計の表示に見ながら、利一の言葉と、照らし合わせる。

「今日は、201×年、4月」

もし、利一が全部合つてていたのなら、俺の記憶を夢だと信じられる。利一が4月7日だと言えば俺は、俺は世界中の時計よりも、利一を信じる。あいつが時間を間違える筈は無い。何故なら利一は、人間時報。完璧な体内時計を持つ人間だ。俺は、中学から利一を見てきて、今まで間違つた事など一度も無かつた。

「6日 8時24分も52秒を回つたとこだけど？」

俺は、甘く見ていた、利一は、完璧な体内時計を持つ人間。7日か6日で俺は、この事を判断するつもりだった だが結果は、ありえない方向へと向かつた。

利一が8時24分も52秒と言つた時、俺の携帯の電波が示していた、時間は、8時25分54秒。1分2秒も誤差がある。

「利一、携帯を貸してくれ」

「えつ何でだよ？」

さつきから利一は、ずっと困惑氣味だ、状況が読み込めて無いからだ。

「お前の時計と、俺の時計を見比べたい」

利一から、携帯を借り、自分の携帯と時刻を見比べる。もしかしたら、やはり俺の携帯がイカれているじやないかと思つたからだ。携帯は、同じ時刻を指していた。

「利一、お前か携帯、どっちかの時計が狂つているぞ」

「はあ？ そんな馬鹿な

利一に携帯を返す。

「！？ アレ」

利一も驚きを隠せないみたいだつた。

「どつちが、正しいか、分かるか利一」

目を瞑り、集中する利一。

「俺だ……俺が間違つていた」

まさかと思つたが、利一が間違つていた 頭が痛い、重い。

「利一……俺、ちょっと頭痛いから、保健室へ行くわ」

「おい、大丈夫か。顔色メッチャ悪いぞ」

「氣遣うように、言う利一。

「ああ、大丈夫だから、早く教室へ行つてくれ」

「一緒に寝てやうつか?」

さつきと同じように、氣遣うように、氣持ち悪い言葉を口にする

利一。

「俺と法廷で戦いたいのか!」

安心した顔で利一は、

「うん、そうじやないとな、千秋は」

「じゃあな、教室に行くから、ゆっくり休めよ」

そう言って、利一は、教室へ向かつて行つた。安心したのは、俺  
もだ。取りあえず、利一は、利一だつた。

## 第8話 保健室で考察

俺は今保健室で、ベッドに寝ている。頭が痛いと言つたらすぐにはベッドを貸してくれた。今、保健の先生は、出かけて居なくなり、保健室は、俺一人だ。静かな保健室に掛け時計の秒針の針の音が、力チ力チと鳴り響く。

俺は、ベッドに横たわり、頭の中で、最初の4月6日と、今の4月6日について、整理をする事にした。

まず、俺は自分の頬に右手を持つて行き、一応確かめた。

「痛い」

軽く、涙が出そうになった、色々な意味で。

この異変に気付いているのは、どうやら、俺一人みたいだ。妹も母さんも、普段と変わらなかつたし、完璧な体内時計を持つ利一でさえ、この異変に気づいていない。恐らく気づいているのは俺一人だろう。何故俺だけが気づいているのか、これも謎だ。

そして最初、つまり、1回目の4月6日に何かが在つたと考えるのが妥当か。やはり1番怪しいのは、このメール。

俺は、携帯を開き、メールボックスを見る。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日田ミッショソン。『踏ませるな、助ける』

怪しそうだ。宛先が不明なところが特にだ。がんばれよ、1日田ミッショソン。『踏ませるな、助ける』これが何を意味するのかだ、1日田つてのは、学校が始まつて1日田つて事か？ ミッショソン、つまり、する事？ 踏ませるなど、助ける。どちらも主語が無くて、全く分からぬ。

そして、おかしな点は、今日、つまり2回目に利一が、時刻を外した事だ、いや、もしかしたら、1回目の時もすでに、外していた

可能性もあるが、もう確かめる術は無い。

幾つかの可能性が生まれた。自分がおかしいのか、世界がおかしいのか。

もし、利一が、時刻を外さなければ、俺は、自分がおかしいと結果を出していたかもしだれないが、このタイミングで、利一が時刻を外すのは、偶然では、無いと思う。

つまり、おかしいのは、この世界。そして、今の状況から、考えられる事は、今、俺、もしくは、世界が。『今日という、4月6日を2回繰り返している』、簡単に言うと『ループ』している、これが、俺が考えている中で、一番辻褄が合った。

この最初の記憶は、1回目の4月6日。そして、今が『2回目』という事か。なんともまあ、SFな答えが、出て来たモンだ。自分で出した答えに、俺は少し笑ってしまった。だってそうだろう、今まで、平凡に人生を謳歌してきた、奴がいきなり、こんな、サイエンス・フィクション、まるで、漫画や、アニメ、映画、ゲームのような、絵空事に巻き込まれてしまふなんて 神様でも、仏様でも良いが、配役のミスじゃないか？ 俺は、その辺に居るモブキャラだと思っていたが、こんな、主人公クラスの出来事、俺には、荷が重すぎる。代つてくれる奴が居るのなら、この役を代つてもらいたい。

我ながら、余りにも情けない愚痴をこぼしたが、助けてくれそうな奴は居ない。こんな事を話しても、信じる奴など居ないだろうし、下手したら、精神病棟へ入れられてしまう可能性もある。全くどうしたモノかな。

待てよ、このまま、何もせずに、明日を迎えるとしたらどうなるんだ？ また、4月7日には、ならず、また、4月6日を繰り返すのか？ 分からないな

ガラ！

「頭は、どうだ――！ 愛ちゃん！」

ドアを開け、けたたましく、現れたのは、言つまでも無い。

## 第9話 チョココロネ

「頭は、どうだ――――！ 愛ちゃん！」

保健室のドアを開け、けたたましく現れたのは、言うまでも無いか。

「お前のせいでの、また痛くなってきたよ」

俺は、立ちあがり、そばに在った台の上から、消毒液の容器を持つて利一の元へ行き、口に容器を突っ込んでやつた。

「お前、いつも、大きな声を出して、喉が大変そうだから、消毒してやるうか？」

「ふいません、ふいません」

そして、俺は、容器を口から離して、  
「で、何の用だ」

「「ホホホホ！ なんの用だじゃないよ、せっかく、昼休みで寂しい  
だらうと思つて、一緒に食べる為に、弁当を持つてきたのに、ほら  
あ、千秋の好きな、チョココロネもさつき購買で買つて來たぞ」

そう言いながら、笑顔で、弁当箱の入つた袋と、チョココロネを見せる、利一。さつきまでの、SF的空気が、「コイツが来ただけで  
一気に崩れた。少し古いが、KY（空氣読めない）が在るが、コイ  
ツの場合KY（空氣壊す）だな

「おいおい、ここで飯食つても良いのかよ」

「大丈夫だ、さつき先生に聞いて来た、軽くなれば食べても良いって  
そういうながら、近くの机に、弁当を広げる、利一。

「それって、軽くつていうのか？」

「人によって、軽いや重い、その他色々の価値観は、変わる。俺に

とつてこれは、軽いから、問題ナッシング！」

親指立てをこちらに見せる。口イツを見ると、なんだか和むなああそつか、確か、動物が可愛く見えるのは、自分よりも馬鹿だからつて、聞いた事あるな。そんな感じか。しかし、この馬鹿は、勉強が出来る。前言撤回だ、ああ、そう思つと、やつぱり腹立つてきた。

まあ、確かに、いつの間にか昼休みで、朝も、色々あつてろくに食つて来てないから、腹ペコだ、俺も、利一の前に座り、バックから、弁当を取り出した。

「「いただきます」」

飯を食べだして、すぐに利一が、

「千秋、さつき、職員室に行つた時にさ」

ああ、此処で、飯を食つて良いか、聞きに行つた時か。

「屋上で、何が在つたらしくてさ、先生達が慌ててたんだよ、どうやら、話しを聞いて察するに、屋上で喫煙をしていた男子5人が、女子に乱暴しようとしたら、逆にやられたとか、どうたら、こうた

「う

その話しを聞いてすぐに、俺は、分かつた。

「その女子つて、鬼塚つて名前じやないか？」

「えつと、女子かどうかは、分からないけど、確かに鬼塚つて名前

は、確か言つてたなー」

「どうやら、2回目の世界でも、鬼塚は、男子に絡まれて、勝つたみたいだ。」

そして、俺は、飯が食べ終わり、5時間目は、普通に授業に出で。特別に何かする訳でも無く、学校が終わって、家へと帰った。

## 第10話 枕でため息

学校が終わって、重い足取りで家に帰った。

そして、今は、4月6日。23時33分。  
俺は、自分の部屋のベッドで仰向けに横たわり、頭の中を整理している。

もし、これで、また4月6日に戻つたら、恐らく何らかのアクション起こさないと、4月7日を迎える事はないだろう。もしこれで何もせずに、4月6日を迎えられたら、ただの夢だった事で、笑い話で済むんだけどな。

メールの内容の、『踏ませるな、助ける』きつとこれが何らかの鍵になつていてると考えるべきか、まずは、何を『踏ませるな』って事を考へる事か、『踏ませるな』コレは、俺に対して言つてている言葉で、『何かを踏ませるな』って事か？ 俺自身に言つているのなら『踏むな』になつている筈だ。

一体何を踏ませないようにするべきのか？ 1回田、2回田と、俺の周りで何かを踏んだ奴なんか、俺の知る限りは、居なかつた。つまり、もつと視野を広げる必要があると言つ事か。

俺の行動によつて、この4月6日は、大なり小なり確實に変化する。1回田と2回田では、大分内容が変わつた。もし、今日、2回田を1回田と同じような行動をすれば、恐らく2回田の内容は、1回田と酷似する筈だ。

このメールの『踏ませるな、助ける』は、本来なら、何かが、踏まれるモノを踏まれないようにしろ、助けられなかつたモノを助けろ、そういう意味か？ それが、ループを解く鍵なのか？ そうだ

と、考えると、まずは、これが何かを特定する必要があるな……はあ～何で俺が、こんなに頭を使わんといかんのだ、俺は、頭がつても、悪いんだぞ。あの高校が受かったのでも奇跡だつたのに。あ～あそこで運を全部使い果たして来たのか？

ため息をつき俺は枕に顔を埋める。

顔を枕からお越して部屋の掛け時計に手をやると、時刻は、23時58分。

あと2分で今日も終わる。2分経つたら、どうなるか、これで、ようやく、内容が大体分かるだろう。もし、4月7日になれば、ただの笑い話だ。もし、また4月6日になれば、確実に世界、もしくは、俺がループしてると、確認が得られる。4月6日に戻ったのなら、俺は、ループを解かなければいけなくなる。流石に、何日も同じ日を繰り返してられるか。

そして、それを解く鍵が、あの謎のメール。これは、ラッキーと思ふべきなのか？　あのメールが無ければ、確実に暗礁に乗り上げてた筈だ。

そして、時計の針が、12を指すと同時に俺は、意識を失った。

俺の睡眠を邪魔したのは、『予想通り』目覚まし時計の、うるさいアラームでは無く、一つのメールの着信だった。

ブーン、ブーン、ブーンブーン！

俺の枕元で、これでもかと、自己主張をする。人類の英知の結晶。携帯には、『新着メール1件。』宛先不明。

From 不明

Sud がんばれよ。

一日田ミッション。『踏ませるな、助けろ』

## 第1-1話 黒くて分厚い本（前書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

## 第1-1話 黒くて分厚い本

俺の睡眠を邪魔したのは、『予想通り』目覚まし時計の、うるさいアラームでは無く、一つのメールの着信だった。

ブーン、ブーン、ブーンブーン！

俺の枕元で、これでもかと、自己主張をする。人類の英知の結晶。携帯には、『新着メール1件』宛先不明。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日目//シジョン。『踏ませるな、助ける』

時刻は、6時58分。携帯は、4月6日を指している。

俺がやらなきゃいけない事は、まず、『踏ませるな』をなんだか特定することだが、『助ける』俺が変えなきゃいけない事は、1回目、2回目と同じことが起こっている事の筈だ、それを踏まえ、俺が『助ける』で、一番最初に連想したのが、不良に絡まれている鬼塚だ。まあ、不良から助ける必要も無いように見えるが、女子が男子に絡まれているんだ、それを助けるって事が、『助ける』が示している事の可能性は在る。そして、恐らく、助けるの前にやらなきゃいけない事が、『踏ませるな』。その何かを踏ませてしまつたら、また、4月6日に逆戻りつて事になるだろう。

ジリ

目覚まし時計が鳴った瞬間、俺は、すぐに止める。

「今日も面倒な、4月6日になりそうだ」

俺はベッドから起き上がりカーテンの隙間から漏れる朝日を見て、呆れ気味に呟いた。

学校へ自転車で向かう俺は、今日、一つの可能性にかける事にした。1回目、2回目の出来事の中で、一番印象に残っているのは、

「アイツ、『鬼塚 千尋』だ。そして、アイツは、不良に絡まる。

『踏ませる、助ける』の『助ける』意味は、鬼塚の事を不良から助ける事だろうと言うのが今の俺の変考えだ。だけど『助ける』の前に、『踏ませるな』が在る。昼休みに、鬼塚が絡まれるところを助ける前に、何か、踏ませないようしないとならない。

『踏ませるな、助ける』の助けるが、鬼塚の事なら、踏ませるな、も鬼塚に関係ある可能性もあるな。

俺が、今日。3回目。4月6日にする事は、鬼塚の観察。ばれたら、あの強烈な奴だから、何されるか、わかつたもんじゃ無いな。メタギのスネ○ク並みに気を付けなければ。

取りあえず今日、3回目は、馬鹿（利一）をスルーし。鬼塚を観察することにした。

ホームルームが始まる前の時間、鬼塚は、1回目と同じく、独りで本を読んでいる。黒くて、分厚い本だ。なんの本だろうか。もしかして、デスノ○トじゃないだろうな。まあ、冗談は置いといて。

それから、1、2、3、4時間が過ぎ、昼休みの時間がやつて来た。鬼塚は、授業が終わると、弁当の袋を持って、教室を出て行つた。俺もすかさず後を追つ。

予想通り鬼塚は、階段を上つて行き屋上へと、入つて行つた。俺もそれを確認し、階段を上つて、屋上へ入ろうとしたが、俺の前に、4人組みの男子生徒が、屋上へと入つて行く、この顔は覚えている不良達だ。俺は階段の隅へ行きその場をやり過ごした。屋上へ入つて行つた。俺は、屋上のドアを少し開け、中の様子を窺う。グランドを向いて座つて、お弁当を広げようとしている、鬼塚に向かつて、不良4人が、煙草をふかしながら歩いて行く。

「何してんだよ、テメー1年か？ 此処は、俺達のたまり場なんだよ、どつかへ消えろよ」

「つるさい、貴方達が、消えなさい、生ごみが

「んだと、コラ一変な本を置きやがって」

一人の男子が、座つて いる鬼塚の隣に置いてあつた、黒い分厚い本を『踏んだ』。

鬼塚は、その男を、物凄い形相で睨んだと思ったら、踏んでいる、足を蹴り飛ばし、そして、倒れた男を踏みつけた。

そして、本を持ち、男達に囲まれる、鬼塚。この光景をは、俺は、前に見た事があつた。そうだ、分かつた、1回目は、この場面で俺と利一が来たんだ。

そして、その後は、1回目と同じように、鬼塚は、男達を蹴散らして行つた。

そして、3回目。4月6日の23時58分。

自分の部屋で俺は、考える。いや、もう、やる事は決まった。

『踏ませるな、助ける』これは、きっと鬼塚の事だ、そして俺がやらなきゃいけない事は、本を踏ませなによつにする」と、不良から、鬼塚を助ける事? の筈だ。

今日、学校が終わつてから、あつた急遽在つた職員会議を、俺は、廊下で盗み聞きしきた。このまま行くと、鬼塚は、停学処分になるらしい、だとしたら、それから助けるという意味の可能性もある俺の意識は、ここで途絶えた。

俺は、携帯のメール受信のバイブ音により目が覚めた。モチロン、時刻は、4月6日6時58分。

携帯には、『新着メール1件。』宛先不明。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日田川シラシヨン。『踏ませるな、助ける』

全て予想通り。いや、いつも通りだが、これも今日で終わにしてやる。俺が、今日やる事は決まっている、鬼塚の本を踏ませないようにして、鬼塚と不良の喧嘩を止める事。

なんとなく、携帯で今日の星座占いを見た。悪気つけだ、4回目で初めてだったが。

運勢は、12位。新たな、出会いがあるかも。

「12位か、全くついて無い1日になつそうだ」

## 第12話 着信

「12位が、全く、ついて無い1日になりそつだ」

そして、4時間目、昼休み。

当然のように鬼塚は、教室を後ににする。そして、俺は教室を出ようとするが、利一が、弁当を持って、俺の教室に入つて来た。計算通りだ。

「おっ、千秋、何処行くんだ？」

俺は、利一の肩に手を置き、

「利一。職員室へ行つて、先生達屋上へ呼んで来てくれ」

利一は、驚いた顔で、

「はあ、何でだよ？」

「さつき、小耳に挟んだんだ、屋上で今不良が煙草を吹かしているつて」

「千秋、相変わらずだな、お前は「  
やれやれといった感じで言う利一。

「いいから、頼むぜ、親友」

そう言って俺は屋上へと走る。利一もさつきの言葉が効いたのか、凄いスピード、廊下を走つて行った。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

最近、運動不足だな、脇腹が痛い。階段を走つて登るのが、こんなに辛いとは……まだ、踏んでくれるなよ『あん』の奴ら。踏んだら どうなるか、また戻るのか……

そして、屋上のドアを静かに開けて、目に入ったのは、座つてい

る、鬼塚と、それを囲む5人の煙草を咥えた不良。良かつた、まだ本は、踏まれていない。俺は、鬼塚方に向かって走る

「つるさい」、貴方達が、消えなさい、生ごみが「

ちくしょう、3回目と同じだ、この後、不良が、

「んだと、「ラー！」変な本を置きやがって」

足を上げ、本目がけ、足を振り下ろす男子。

「させえるかあー！」

ふざけんじやねえぞ。もう沢山だ、終わらしてやる、4田6田を。永遠に生きたいと思っている程、俺は、強欲じやねえだよ。あと、

数十センチ

俺は男達の中へ潜り込み、本を間一髪、掴んで、鬼塚の手も握り、男達から距離を取った。

「ちょっと、貴方何、勝手にの人手を握つて。ちょっと、どいてくれるかしら、あの単細胞な、馬鹿に、赤色でも見せよつと思つているんだから」

「あん！ 何だテメーは、ソイツの連れか？」

「おいい！ 煽るなよ。てか、アイツまた、アンだよ、ホント意味知りてー、グ格レば出て来るのか。とつ、そんな事、考えている、暇は無い。

「まあ、取りあえず、礼は、言つとくわ、ありがとう。だから、その本を返してくれるかしら」

「ああ、分かった」

俺は、小声で、

「ちよつと、待て！ 本を返しても、お前、あいつ等に手を出すな

「あ

「なんで、貴方の言つ事を聞かないといけないのかしら？ 疑問だわ

イラついている様子で俺に言つ、鬼塚。

「なんだって、お前が手出したら、あいつ等、病院送りになっちゃうだろ」

不良達を指さして、大きく叫んでしまう俺。

「な！？」

俺の言葉に驚いている不良達。だがお前達は知らないかもしけな

いが、コイツは、それ位の戦闘力を持っている。お前ら、3回中、3回とも、ノックアウトだからな。

「だから下手は手を出してお前が停学とか退学になつたの馬鹿らしいだろ?」

「そうね、確かに、その通りかも、知れないけど、アレは、どうするの？ 私達の意思に関係なく、向こうでは、やる気満々みたいだけど」

確かに、不良達は、今にも、襲いかかってきそうな、勢いだ。

「じゃあ、私は、何もしないから、貴方がなんとかしなさいね、ヒ  
タクツ、利一は、一体何しているんだ、まだ、教員は、来ないのか？」

塚。

ほおゝ、女を庇うなんて、いい度胸してるじゃないか」

じわじわ俺との間合いを詰める良5人。どうする？ どうする？  
俺にコイツらを相手に出来る戦闘力なんて、ないぞ！

逃げれば、ループ。逃げなきゃ、殺られる。

逃げちゃ駄目だ、逃げちゃ駄目だ、逃げちゃ駄目だ、逃げちゃ駄  
目だ、逃げちゃ駄目だ、逃げちゃ駄目だ、逃げちゃ駄目だ、逃げ  
や駄目だ、逃げちゃ駄目だ、逃げちゃ駄目だ、逃げちゃ駄目だ、逃  
げちゃ駄目だ、逃げちゃ駄目だ、逃げちゃ駄目だ、逃げちゃ駄目だ、  
逃げちゃ駄目だ、逃げちゃ駄目だ、逃げちゃ駄目だ。

「俺の声が漏れていたのか、後ろから鬼塚が  
早く、A〇フィールド張りなさいよ、殺られるわよ」

出来るなり、すでにせつてるわー！ 全開にしてるわー。  
はは、こうなりや、玉砕覚悟だ。俺は、もうどうにでもなれ、思  
つた其の時。携帯のメールが来てバイブが鳴り、ポケットから右足  
へ振動が伝わった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4985z/>

高校生の時間外廊道（じかんがいろうどう）

2011年12月20日22時47分発行